



Q154. ライフステージに応じた関わりって②？

A. 学童期と青年期についてです。



学童期は、親からの精神的・肉体的に分離する時期に当たります。子どもが自身で培ってきた「自我」を大切にしながら、自身で「その人らしさ」を創っていく時期なのですね。親にとっては「子どもは親の分身では無い存在」ということを子育てを通して学んでいく時期です。

子どもにとって大切なこととして、能力に応じて学習する、ということがあげられます。ひとり一人は能力に差があるものなので、その子ども本人に応じた学習をまず第一に考えなければいけませんね。学校選びもその範疇に入り、ここでも「子どもは親の分身では無い存在」ということですね。

学習の中には、性を含めた自身の身体の変化や状態を知ることや、それを知らせる方法の習得も含まれています。自身の心身機能の状態を知ることでも必要で、特性や障がいを自身で認知することの初歩の段階でもあります。親や支援者は、子どもの実際の年齢に応じた対応を考え、実行していかなければなりません。

地域の人との関わりを広げていながら、放課後や余暇の過ごし方を身に付けていくことも大切な学びのひとつ。

移動支援や宿泊体験など、親やよく知っている人以外の人とも関われるようになっておきたいところです。

ここに「放課後等デイサービス」というサービスが位置しています。

学童期は、自分と他者が違うということを意識しだす時期でもあります。他の人と比較されすぎて自信を無くしてしまったり、無理なことを要求されて応えられないために自分を否定してしまうことがあります。「そのままのあなたでいい」「あなたには価値がある」というメッセージを、本人が解る方法で伝え続けていくことが、自己肯定感を高めるために重要です。

地域の人と関わることや、放課後等デイサービスなどを利用することで、家で見せている顔とは違う顔を持つ経験になります。

家で見せている「子どもの顔」だけではなく、「先輩としての顔」や「後輩の顔」「お客さんの顔」「仲間に見せる顔」「好きな人への顔」などの獲得ですね。

そうしたTPOに合わせた自分の使い分け、の経験を積むことも必要なこと。

青年期になると、そうしたさまざまな経験の積み重ねのうえに「大人としての顔」を持つことができるようになっていくからです。
親からの「精神的・肉体的分離」から「別の人格」として自立し、別の人生を自律して歩いていく準備、をする時期になってきていきます。
中学・高校の時期に、済ましてしまいたいところですね。

大学に行くのか就職するのか、[高校卒業後の進路](#)も気になってくるころ。
就職するとしても、どのような雇用形式で働くのか、も考えていかななくてはけません。
そのときになって慌てなくてもよいように、これまで積み上げてきた自信を礎にして自分の気持ちを自分の言葉で表現していかななくてはいけない時期です。

ここまでが、放課後等デイサービスが関わっていくライフステージです。
乳・幼児期に関わる[児童発達支援](#)から、放課後等デイサービスの関わる高校卒業までを通して考えてみました。
3年生の子どもに関わっているから、3年生の今だけを見ていればいい、ということではなく、[先々のライフステージ](#)も意識していかななくてはいけないのですね。

一定の先を見据えながら、[相談支援専門員](#)が本人や親の意向を聞き[児童支援利用計画](#)を書きます。
それを基にして、[児童発達支援管理責任者](#)が、ライフステージに合わせた、この3カ月でその事業所のできることはなにか、を[個別支援計画書](#)に書きます。
それを読んだ現場の[支援員](#)が、そのときに必要な支援を考え実行していきます。

現場の支援員は、個別支援計画に則った記録を毎回書き、児童発達支援管理責任者と共有する。
児童発達支援管理責任者は少なくとも6カ月に一回以上は[モニタリング](#)してまとめ、相談支援専門員とできていることできなかったことを共有する。
それをふまえて、相談支援専門員は本人や親と面談し、新たなニーズを探っていく、という[連携](#)をしながら協働していくのですね。

《MENU》

[《ライフステージに応じた関りって①？》](#)

[《できないことがあるとダメなの？》](#)

放課後等デイサービス支援事業
Support Project of
Day-service for After-school
At Kyoto

2023-10-16 掲載